

はじめに

少子化や核家族化、価値観の多様化や経済状況の変化等による急激な社会の変化により、現代は「家庭教育が困難な社会」と言われています。

このような背景のもと、島根県教育委員会では、親同士の交流をとおして、“親としての役割”や“子どもとのかかわり方”の気づきを促す『親学プログラム』の開発・普及を図り、同時にプログラムを進行できる『親学ファシリテーター』の養成を行ってきました。

また、平成25～27年度の3ヵ年で、喫緊の社会問題である「いじめ」や「児童虐待」の未然防止に対応した親向けプログラム（以下、『親学プログラム2』）の開発に取り組んできました。

このたび、島根大学の肥後先生にご指導を仰ぎながら、ワーキンググループで検討を重ね、開発した学習プログラムを『親学プログラム2「実施版」』として、発行することに至りました。

現行の『親学プログラム』は、“わが子との関係性における家庭内での親の学び”に重点を置いたのに対し、『親学プログラム2』は、“地域社会との関係性における家庭外での親の学び”に、重点をおいています。この2つのプログラムをセットにして活用することで、気づきによる親自身の学びに加え、親同士の関係づくりや地域全体で家庭教育を支援するネットワークづくりにも役立つものと考えています。

2つのプログラムを活用した家庭教育支援が県内の保育所、幼稚園、小中学校、公民館等の社会教育施設、また、子育て支援センター、子育て関係のNPO法人、子育てサークル、企業等、様々な場で行われ、地域社会全体で家庭教育支援の機運がさらに醸成されることを期待しています。

おわりに、本プログラムの開発・普及にあたり、ご指導ご支援を賜りました肥後先生をはじめ、関係機関のみなさま方に心からお礼を申し上げます。

平成27年10月

本冊子で使用している「親」の表記は、“子の養育を行う者”を指して用いています。

発刊に寄せて

—親学，それは“やり残しの自分”を育てるプログラム—

今から約 35 年前，心理学者エリクソンは「現代人にとって最大の心の危機は，自分たちの子どもを生み育て，自分たちの文化や価値，そして生命を，次の世代に託していく，そのような心の営みに大きな価値を見出すことができず，むしろそうした営みを負担に思ったり苦痛に感じたり，そのような役割を回避しようとする心理的な動向が生まれていることだ」と述べました。（小此木啓吾「乳幼児精神医学のすすめ」（別冊発達 9，1989 年）による）

私たちおとなが，子育てという形で子どもと共に生きられるのは，長い人生の中では，ほんの限られた時間にすぎません。その「重なるの時間」が何よりの喜びであった時代は，エリクソンの言うように過ぎ去ってしまったのでしょうか。子育てという「重なるの時間」の充実こそが，子どもの発達の可能性を，つまり未来を，次の時代を，命の繋がりを，根底から支えているものです。同時にその充実は，おとなになった私たち自身の「今の成長」を保証するものでもあります。私たちはみんな，子ども時代の「やり残しの自分」を抱えておとなになります。子育てのプロセスは，そのやり残した自分の姿を子どもの中に見出し，それと出会うことで，もう一度，自分のやり直し，育て直しができる日々でもあるのです。

この「親学プログラム 2」は子育てという重なるの時間の充実のために作られました。いじめや児童虐待という目立つテーマを取り上げているために，少し取り付き難い感じがするかもしれません。けれども中身をご覧いただければおわかりのように，その根底に流れているものは「さまざまな人の在り方（異なる意見や考え方，態度や行動など）を理解しようとする事」，そして「人（よその子）も自分（わが子）も等しく大切にしようとする事」です。子育ての時期に，一人の親として，このような意味での「自分のやり直し」を多くの人を経験しておくことは，高齢化の進む中，お互いがわかり合い支え合いながら暮らしやすい地域社会を築いていくことにもつながるのではないのでしょうか。本プログラムが多くの方々に活用され，よりよい地域社会の礎を作る社会教育プログラムとして発展していくことを心から願っています。

平成 27 年 10 月

開発アドバイザー 島根大学教育学部 教授 肥後 功一